

これが日本農業の 生きる道だ

昨年突如浮上したTPP問題。
しかし、自由化自体は日本にとって
数十年來の課題である。
その焦点である農業について、多角的に論じる。

【鼎談出席者】 月刊『農業経営者』編集長

昆吉則

東京大学大学院農学生命科学研究科准教授

川島博之

東京大学大学院農学生命科学研究科教授

鈴木宣弘



——現在の日本の農業をどのようにご覧になりますか。

鈴木 私は全体としてみれば脆弱化していると思います。

例えば農業センサスによれば、この五年間で就業人口が二割以上減り、就業者の平均年齢は三歳上がって六六歳になりました。このような状況のなかで、地域の農地を託していけるような次世代の担い手をどのように見出し、支援していくかが重要になってくるでしょう。

昆 従来型の農業と農業政策が岐路に立たされていることは間違いありません。ただ、ピンチはチャンスです。まずは正確な現状認識が必要ではないでしょうか。

厚生労働省の国民栄養健康調査によれば、日本人一人当

たりの一日の摂取カロリーがピークだったのは、一九七一年の二二〇〇キロカロリー、減反政策が始まる年です。その後は減り続けて、二〇〇四年に終戦直後と同じ一九〇〇キロカロリーになり、それ以降は一八〇〇キロカロリー台になっているのです。このデータからも分かるとおり、われわれは量的などころでは食糧に充足しているのです。ところが日本の農業政策は終戦直後の欠乏の時代を想定してつくられています。食糧自給率などが幅を利かせているのはその証拠。そろそろ豊かな社会、過剰の社会に合わせた制度設計が必要なのではないでしょうか。

川島 マクロの観点からいえば、世界的には二〇世紀半ば

を境に食糧が余り気味になっています。化学肥料、農業コンバインなど農機具の発達により、食糧生産はどんどん増えていく。そうすると、もう作っていればよいという時代は終わり、コモディティのようにより相手がよろこぶ商品サービスで勝負しなくてはなりません。そこを無視して、「コメは二〇〇〇年の歴史を持つ日本特有の文化だ」とか「農家の人たちが大切な食糧を作ってくれるのだから、それを消費する」という経済原理とは相容れない論理がまかり通っていて、農業再生の邪魔をしている状況だと思います。

日本のコメの競争力は強い

——昨年、環太平洋連携協定(TPP)が話題となりました。日本はどのように関与すべきだとお考えになりますか。

鈴木 現在の農業が疲弊している大きな原因の一つは、貿易自由化を推し進めすぎたことにあります。例えば、一九八〇年代に牛肉や果実類の自由化を進めた結果どうなったか。一部の強い農家は生き残りましたが、他方で八割以上あった自給率は三割台にまで低下しています。供給能力という点では、相当に縮小しました。TPPは関税の完全撤廃を原則とする厳しい条約です。これを拙速に行えば、農業、特にコメへの影響は計り知れません。一俵

三〇〇〇円台のカリフォルニア米と勝負するのでは、よいものを少しでも安くと努力している農家こそが潰れてしまっています。

昆 大きな変革ですから、少なくとも一部に影響があることにはなるでしょう。特に乳製品や麦などは苦しいと思います。しかし日本農業存亡の危機であるかのような論調には首を傾げます。TPPでコメがだめになるとはどうてい考えられません。現実問題として、TPPに参加するコメ生産九カ国が生産しているコメの九五%は長粒種です。アメリカでさえ七割がそう。東南アジアの高冷地の一部でコシヒカリなどが作られ始めていますが、日本人の味覚に合うものを大量生産できる状況ではありません。日本米と競合すると思える米国の中・短粒種の輸出量は、せいぜい八〇万トンくらいで、しかも品質がかなり違います。

価格差については、一九九三年のコメ不足を思い出せばよいでしょう。あのとき日本はタイや米国の最高級の長粒種を輸入しましたが、結局誰も買わなかった。いまの時代に、カロリー摂取量や価格の問題でコメを語ることは、現実のマーケットや消費者の志向を無視した議論です。ましてや日本のコメの九割が外国産になるなどという数字まで出回っていることには驚きを禁じえません。



昆

顧客を意識し マーケットを理解した「経営者」が 活躍できる場が必要だ

こん きちのり

1973年東洋大学卒業、株式会社新農林社入社。農業出版編集に従事後、87年に農業技術通信社を設立。93年日本初の農業ビジネス誌『季刊農業経営者』創刊（98年より月刊化）、編集長を務める。著書に『強い農家はこう考える——大規模農家の経営展望』（監修）など。

鈴木 しかし、まさにマーケットの問題として、たとえば日本がコメの関税をゼロにして市場が大きく開かれれば、アメリカも東南アジア諸国も日本市場向けの商品を作らざるを得ない。オーストラリアでは最盛期には一〇〇万トン以上の短粒種米を生産し、そのほとんどを輸出していました。ビジネスチャンスとあれば、世界中が狙ってきますし、生産を続けるなかで外国産米の品質も向上してきます。いまの前提を固定して議論することは危険ではないですか。

昆 現在のように一〇〇%近いシェアを占めているほうが不健全なのだと思います。消費者にはもっと選択の機会があつてよいし、場面によって使い分ければよいわけです。ただ日本米の品質の高さというのは、やはり相当なもの

で、その生産は簡単ではありません。コンバイン一つとっても、大きな違いがあります。短粒種を作っている一部の国を除いては、使用するコンバインはコメにもトウモロコシにもヒマワリにも対応できる汎用性の高いものです。ただし、脱粒性の悪い日本品種を食味を維持するために高水分条件で刈り取ろうとすれば、約四割は取りきれずに田んぼに捨てることになってしまう。これはほんの一例ですが、日本と同レベルの日本米を生産しようとすれば、そのリスクは思いのほか高いのです。

川島 もう一つ大事なことは、日本のコメ市場はそれほど大きくないということです。売り上げが一・八兆円程度ですから、これを企業と比べてみると、日本で一三〇番目く



川島

自給率ではなく 安定した外交関係のなかでの 食糧確保を論ずるべきだ

かわしま ひろゆき

1983年東京大学大学院工学系研究科博士課程単位取得退学。東京大学助手、農林水産省農業環境技術研究所主任研究官を経て、98年より現職。工学博士。著書に『作りすぎ』が日本の農業をダメにする』『食糧自給率』の罠』『食糧危機』をあおってはいけない』など。

らしい会社の売り上げと同程度です。某大手家電量販店と同じくらいですね。その意味で、日本市場はそれほど魅力的というわけではありません。しかも少子化で市場規模はますます小さくなっていくわけですから。

昆虫むしろ外国に向けて日本の農産品を輸出するチャンスとして捉えていかないとけません。裕福な層が増えている中国にどうやって日本のコメを売り込むか。日本と漁獲を競争してまでマグロを食べるようになり、秋葉原で炊飯器を買い込む層がいるわけです。

TPPかFTAか

鈴木 私も競争や自由化にやみくもに反対なわけではあり

ません。TPPはこれまでの自由化交渉とは異なり、原則は例外なく関税を撤廃することです。これでは努力している人のインセンティブを失いかねない。日本はそれとは異なる、国情に合わせて例外がある程度認め合うような、互恵的な自由化交渉を進めるべきです。

川島 コメの議論をすると、どうしても熱くなってしまう。私は戦術的には、日本の農業をコメとコメ以外とに分けて考えたほうがよいというのが持論です。自由化の話は、コメ以外の農産物については非常に合理的で、実際海外の値段と比べても野菜はそれほど変わりません。すでに市場原理が浸透していて、農水省の保護などを必要としな

い自立した農家、農業経営者がやっているわけです。畜産、

野菜、果実などは、TPPはむしろ外に出ていくチャンスになります。国内に目を向けても、畜産などではすでに棲み分けが進んでいて、家庭で食べるときは国産牛で、牛丼チェーンでは海外産。これは、苦しいといわれる乳製品も含めあらゆる農産品で見られる現象だと思います。

他方でコメは従事者が多く、日本の土地制度、家族制度などにまで行き着くような複雑な問題です。これまでの政治的経緯もある。いたずらに対立を煽るのではなく、複雑なしがらみを解いていく作業を一〇年ぐらいかけてやればよいと思います。逆にコメにこだわって他が進まないという事態は避けるべきです。もう一つ、TPPにしても、たとえば明日から関税ゼロということではありません。これから具体的なありようを検討するわけですから、その交渉のなかで譲歩を勝ち取っていけばよいのです。

鈴木 それができれば苦労はしないというか……。

川島 外交交渉では、日本人ってウブなんですよね。日米開戦前のハル・ノートと一緒に、満州から撤兵しろと言われたら、思考停止でお手上げになってしまう。あれは最後通牒ではないのだから、そこからどう巻き返していくかが交渉でしょう。コメについても、最初はどの国も大上段に構えますが、話をしていくとお互いにいろいろな事情があ

るものです。昆さんがご指摘になったように、相手の輸出能力の問題もあります。

鈴木 もう一つ私が危惧するのは、農業が不必要に悪者にされてしまうことです。これまでのFTA交渉を振り返ると、農産物の妥結は比較的早く、工業製品部門でもめることのほうが多い。農産物は果物や野菜の関税は三％程度ですし、コメとその他のほかいくつかを除けば、すでにかなり自由化を実現しています。他方で工業製品については、日本側が相手に関税ゼロを強く求めるだけで譲歩の準備がないことが少なくない。これでは交渉はまとまりません。

川島 たしかに経産省もうまくて、悪いのは農業だということになっていくことはあります。ただ農業側もコメ以外は思い切って受け入れるという戦略はありうるわけですから、そこは知恵をしぼってほしい。国内向けには激変緩和措置ということでお金を配ることもできます。言葉は適当でないかもしれませんが、それを農地を手放す人の退職金代わりすればよいのです。

昆 コメはどの程度の関税であれば収まりがつくのですか。
鈴木 現在のキロ当たり三四一円、率にして七七八％の関税を一％たりとも下げられないというのは極端な主張です。私は二〇〇％くらいまで関税を下げ、それに国内対策を組み

合わせるとというのが現実的ではないかと考えています。

昆 二〇〇%だったなら、TPPでなくても通らないでしょう。

鈴木 まだ高いですか？（苦笑）

昆 私は必ずしもTPPでなくてもよいとは思いますが、どのようなアジア戦略とつながるのか、いまひとつ不明確です。

鈴木 アメリカやオーストラリアと異なり、アジアの国々であれば柔軟に交渉できる余地は大きい。ある程度可能なのではないかと思います。

川島 私もどうしてもTPPにこだわる必要はないと思います。一カ国といっても日本にとっては大切な貿易相手はアメリカですから、アメリカとの自由貿易協定（FTA）が仕切り直しできればよい。韓国の例がありますから、そう高いハードルではないでしょう。

鈴木 TPPの弱点は、アジア市場を十分に取り込んだものになっていないことです。中国も韓国もタイもインドネシアもノーと言っているわけですから。アジア市場を中心とした自由貿易協定網を促すようにするべきです。私は日中韓の事前交渉のFTAの委員を務めています。年末までに報告書をまとめ、来年から交渉開始になる予定です。

昆 再びコメの話に戻って恐縮ですが、私の心配はコメが

外国産との競争に勝てるかどうかよりも、日本側においてそこで勝負するシステムがきちんと整備されているかどうかです。生産・流通・販売システムとそれを支える政策・制度が適正かどうかが問われなければなりません。それに自由化の議論をしても、結局現状の変革を嫌う人たちによる反対のための反対になってしまいます。

マーケットを意識した担い手づくり

昆 今後の農業を考える際に、鈴木さんが冒頭に指摘されたとおり、担い手の問題が重要になります。どのような担い手がふさわしいのか。手前味噌で恐縮ですが、わたしどもは『農業経営者』という雑誌を発行しています。「農業経営者」という言葉に込めた思いは、売り上げや規模の小ではなく、マーケットに気づき、消費者・顧客の志向を理解する人たちということです。そういう人たちは、彼ら自身の努力によるイノベーションを進めています。

逆に農家全体がなかなかそちらの方向にシフトできないのは、変革の阻害要因、つまり国内であれ国外であれマーケットを無視しても十分にやっているシステムがあるということです。それが現在の農業政策であり、農業団体です。私は農業問題は農業関係者問題であるとよく言います。

農業関係者の居場所づくりのために農業問題が次々に創り出されているのではないのでしょうか。

川島 現在の農政の基本となっているのは、コメや食糧が足りない時代の制度や組織ですから、過去との整合性に囚われて、現状にまったく対応できていない。すでにやる気のある自立した農家が一〇万人くらいいるとして……

昆 それで十分です。

川島 農協、農水省、関連する独立行政法人、地方自治体職員、それに大学の農学部教員も含めてもいいですが、どれだけの人数が関わっているか。選手が三人くらいしかないのに、監督やらコーチやら顧問やらが群がっている状態ですね。自由化反対で騒ぐのも、選手ではなくそちら

のほうです。過保護は産業を育てません。本田宗一郎さんは、通産省のおかげで成功したわけではないですよ。

昆 むしろ邪魔されたくらい。

先日「農業白書」をめくってみると、農業、あるいは農業に限りませんが、一番肝心な増収について何も示唆するようなことが書いていない。減反政策があるから言えないわけです。だいぶねじれていますね。

鈴木 コメの生産調整は見直さないといいけません。四割も生産を抑制するためにお金を費やすというのは、理屈に合わない。もっと力のある人に自由に作物を選択して作ってもらう、同じお金を使うのであれば、その販路を国内外へどう拡大するかということに焦点をあてるべきでしょう



鈴木

アジアの国々とであれば、
より柔軟な自由化交渉を
進められる

すずき のぶひろ

1982年東京大学農学部卒業、農林水産省入省。農業総合研究所研究交流科長、九州大学教授などを経て、2006年より現職。農学博士。著書に『震災復興とTPPを語る―再生のための対案』『TPPと日本の国益』『食料を読む』など。

う。輸出補助金のような形でもよいと思います。

昆 問題なのは、自立したプロの農家は きちんとした土壌管理、栽培管理、収穫調整をやって品質を維持しています。しかし他方で、農家の大半はお年寄りの、こう言っては失礼かもしれませんが「趣味的」な農業で、それで生計を支えるのではなく、収穫したものを親戚縁者に配って、余ったものを農協に供出する。そこには十分な品質管理などは望めません。そうなるとプロと趣味の人との玉石混交もいいところで、ユーザーたるコメ卸業の人たちはすごく困っています。実はこれは大きな問題です。ホンダやトヨタの工場から不良品が出荷されたら大問題でしょう。しかもそれらの品質管理は年々改善されているはずです。農業はむしろ逆ではないでしょうか。

また、リスクヘッジをするためにコメの先物相場も進めるべきなのに、全農はбойコットしています。先進国において穀物を生産しようとするとき、あれがなければ非常にリスクが高いわけです。自由に作って売るためにはやるべきだと思います。

川島 そう考えてくると、やはり農業問題は食糧の問題ではなく、農協のあり方、土地制度、いわゆる「偽装農民」の存在など、かなりの程度政治的・社会的問題です。

——どのような方向に変わっていけばよいのですか。

鈴木 日本は残念ながら広大な土地がありませんから、面積当たりの収穫量を増やすことしかない。そこに日本の技術を集めすべきです。私の取材したところでは、ニラの収穫量がそれまで一〇アール当たり六トンくらいであったのが、一・八七トンの収穫を実現した農家がありました。もちろんそこにはさまざまな工夫があるわけですが、所得も一〇〇〇万円を超えています。こういうチャレンジを応援できるような仕組みを考えたいですね。

昆 海外にもぜひ目を向けたい。日本のおいしい農産物が海外の消費者にどんどん広めたいところです。そしてその先には、単なる商品を超えた日本の食文化のようなものが輸出できれば、なお素晴らしいと思います。メイド・イン・ジャパンを広めることから、海外で生産する。メイド・バイ・ジャパニーズのブランドを確立することです。ウクライナでコメを作る。外食産業とタッグを組んで、たとえばマグロ丼をファーストフード感覚で展開してみる。いろいろな面白いチャレンジは始まっています。

食糧安全保障をめぐる問題

——自由化の際に語られる重要な要素として、食糧安全

保障という考え方があります。

川島 成果のマーケットが一つになっていく流れは、止められません。もちろん段階はありますが、流れ自体は不可逆的です。格安航空会社（LCC）の登場で、最近は数万円で海外に行ける時代です。貨物についても同様で、どこからでもどこへでも物を運ぶことができる。ごく短期的な需給関係の不均衡はあるにしても、食糧安全保障というのは、議論自体が成り立たないと思います。

鈴木 私はそうは思いません。世界では、軍事力・エネルギーと並んで、食糧は国家存立の三本柱です。貿易自由化の進展により食料生産が一部の国々に偏るなか、ちよつとしたショックで価格が跳ね上がり、それをみて投機マネーが入ってさらに高騰するという流れは十分に考えられます。一方で、不安心理による輸出規制も起こりやすくなっており、それは、さらなる価格高騰と輸入途絶につながります。やはりそれなりの事態に対応できる体制は整えておくべきですし、その際の基準となるのは、コメを中心としたカロリーベースの自給率です。

オランダのようにカロリーベースの自給率が低くても花や野菜などが非常に強い農業だからそれでいいという考え方もありますが、それでは不安だというのが私の考え方

です。金額ベースの自給率は経営の力を測る意味で重要な指標ですが、だからといって花と野菜を食べて急場をしのぐわけにはいきません。

川島 私は、個別の「○○安全保障」というのは、あまり意味のない議論だと思います。「満州は日本の生命線」みたいな議論は危険です。食糧があつても石油がなければ、日本はあつという間に倒れます。それこそ外交を機能させ、そうならない状況を作り出すことこそが重要なのです。

食糧自体を見ても、世界は圧倒的に作りすぎです。価格が落ちていて農家が大変だから農業問題が起こっているのです。日本は大部分の食糧をアメリカ、オーストラリア、ブラジルなどから輸入していますが、それらの国々との外交関係は良好で、彼らとしても農産物が余っているのだから、輸出規制をかける理由は何もありません。

昆 加えれば、一定期間必要なものを確保することであれば、商社主導で海外備蓄をすればよいのではないのでしょうか。オーストラリア、ブラジル、カナダでよいと思います。どこで買って、不必要になつたらどう売るか、商社なら目が利きます。その点でも友好国との関係を大切にするという外交的配慮とセットで考えることでしよう。■